

# 31E13-am09S

3次元培養ヒト乳癌組織から分泌される免疫作用物質およびその制御性T細胞動態への影響

○清海 杏奈<sup>1</sup>, 田所 弘子<sup>1</sup>, 蒔田 益次郎<sup>2</sup>, 平野 俊彦<sup>1</sup> (<sup>1</sup>東京薬大薬, <sup>2</sup>癌研有明病院)

【背景・目的】乳癌は乳房組織に発生する癌腫で、本邦でのその発症率は増加傾向にある。本研究では、ヒト乳癌組織が放出し免疫系に作用する物質を調べることで、乳癌組織が体内の免疫系に及ぼす影響を考察した。またそれらの知見に基づき、乳癌治療の個別化や予後予測に有用な、新たなバイオマーカーを見出すことを目的とした。【方法】12名の乳癌患者の乳癌組織を3次元培養し、ヒト乳癌組織の増殖能、培養上清中のサイトカイン濃度、および培養上清がヒト末梢血単核細胞(PBMC)のT細胞マイトゲン応答性増殖や制御性T細胞動態に及ぼす影響について検討した。【結果】3次元培養ヒト乳癌組織が主にIL-6およびIL-10を放出することを明らかにした。ヒト乳癌組織の3次元培養上清は、健常者PBMCのT細胞マイトゲン応答性増殖率を有意に増加させた。また、乳癌組織の3次元培養上清は、健常者PBMC中の制御性T細胞の割合を増加させた。一方、IL-6と10は制御性T細胞動態に影響しなかった。【考察】ヒト乳癌組織が数種のサイトカインを放出し、宿主免疫に影響を及ぼすことを示唆した。更に、ヒト乳癌組織の3次元培養上清が制御性T細胞動態に影響を及ぼすことを新たに示した。乳癌組織由来の制御性T細胞動態に影響を及ぼす因子は、サイトカイン以外の未知なる免疫作用物質であることを示唆した。